

諸葛亮像の変遷

渡邊 義浩

はじめに

一、「忠」臣と有能な政治家の狭間

二、正閔論

三、偉大なる軍師

四、「忠義」の臣と神仙と

五、「官」「民」の融合

おわりに

はじめに

三国時代における蜀漢政権の丞相であった諸葛亮は、その死後も多くの中国人の記憶の間に生き続け、様々な諸葛亮像が創造されてきた。⁽¹⁾ それらの像は、三種類に大別できる。第一は、正史に代表される「官」製の諸葛亮像であり、第二は、民衆の間に流布した亮像である。そして第三は、日本でも馴染みが深い『三國志演義』における諸葛亮像である。

本稿は、様々なレベルにおける諸葛亮像の変遷の検討により、亮に託された多くの思いを探ることを目的とする。なお、その際留意すべきは「官」製の諸葛亮像の検討方法である。それは、豊富な史料の中から、議論に適した史料だけを恣意的に引用できるため、これを防ぐには、ある一定の史料における諸葛亮像を統計的に処理する必要がある。その際正史は恰好な材料となる。⁽²⁾ そこで「官」製の諸葛亮像は、正史を中心に時代的な変遷と特徴を検討することにした。⁽³⁾

一、「忠」「臣」と有能な政治家の狭間

1. 陳壽の諸葛亮像

周知のように、諸葛亮に関してまとまった史料を提供するものは、陳壽の『三國志』である。陳壽の諸葛亮評価は、評して曰く、諸葛亮の相國爲るや、百姓を撫し、儀軌を示し、官職を約し、權制に従ひ、誠心を開き、公道を布く。忠を盡し時に益する者は讎と雖も必ず賞し、法を犯し怠慢なる者は親と雖も必ず罰し、罪に服し情を輸す者は重しと雖も必ず釋し、辭を遊ばせ巧みに飾る者は輕しと雖も必ず戮す。善は微として賞せざる無く、惡は讎として貶せざる無く、庶事精練して、物は其の本を理め、名に循ひ実を責め、虚偽は齒せず。終に邦域の内に於いて、咸畏れて之を愛し、刑政峻なりと雖も怨む者無きは、其の心を用ゑること平かにして戒を勸めること明らかなるを以てなり。治を識るの良才にして管・蕭の亞匹と謂ふ可し。然ども連年衆を動かし、未だ成功する能はず、蓋ふに應變の將略は、其の長ずる所に非ざるか。』⁽⁴⁾ 『三國志』卷三十五 諸葛亮傳

とある評語の部分から検討されることが多い。古来、最後の軍事的才能を疑問視する部分をあげつらい、陳壽は父が馬

護の參軍として諸葛亮に罰せられたことを恨んで評語を悪く書いた(『晉書』卷八十二 陳壽傳)など、陳壽の歴史家としての見識を疑う議論も提出されている。⁽⁶⁾ 唐の劉知幾に至っては、「記言の姦賊、載筆の凶人」(『史通』卷七 曲筆篇)と陳壽を罵倒している。しかし、陳壽は諸葛亮を悪く書いたのかといえは、『諸葛氏集』の上奏文の中で陳壽は、此の時に當りて、亮の素志、進みては龍驤虎視、四海を苞括せんと欲し、退きては邊疆に跨陵し、宇内を震蕩せんと欲す。又自ら以爲へらく、身無きの日、則ち未だ能く中原を蹈み涉り、上國に抗衡する者有らず、と。是を以て用兵蜂めず、屢々其の武を耀かす。然ども亮の才、治戎に於いては長と爲すも、奇謀に短と爲す。民を理むるの幹は、將略よりも優る。而も與に對敵する所、或ひは人傑に値ひ、加へて衆寡枉しからず、攻守體を異にし、故に連年衆を動かすと雖も、未だ克つこと有る能はず。昔蕭何は韓信を薦め、管仲は王子城父を擧げ、皆己の長を付るは、未だ兼有すること能はざるが故なり。亮の器能政理は、抑々亦管・蕭の亞匹なるも、時の名將に城父・韓信無し、故に功業をして陵遲し、大義をして及ばざらしむるか。蓋し天命歸する有り、智力を以て争ふ可からざるなり。

(『三國志』卷三十五 諸葛亮傳)

と述べている。諸葛亮に対する陳壽の評価は、評語の部分ではなく、むしろここで全面的に展開されている。諸葛亮が軍事能力としては奇略を得意としなかったこと、相手が名将であったこと、⁽⁷⁾ 軍事よりも政治能力が高かったこと、その政治能力を十全に揮うために軍事を託す名将がいなかったこと、という亮に不利な四点の状況を掲げ、最後には天命まで持ち出して敗退の責任を亮に求めない。全面的な諸葛亮礼讃と考えてよいであろう。

蜀漢の滅亡後、旧蜀漢構成員は、曹魏・西晉において不遇であった。その中で无周一門の儒者達は、蜀漢の降伏を推進した見返りに、比較的高い地位に就くことができた。⁽⁸⁾ 陳壽が、著作郎として『諸葛氏集』を編纂し、その後平陽侯相に昇進できたことは、无周門下であったことにも要因がある。しかし、北魏の薛聰が、自分は祖先の薛永が劉備に従い

入蜀したため「蜀姓」と呼ばれるだけで、決して本来の「蜀姓」ではないと弁明しているように(『北史』卷三十六 薛聰傳)、後世「蜀姓」という言葉は、劣った家柄を意味するに至った。⁽⁹⁾ 旧蜀漢構成員は、曹魏・西晉時代に貶められたのである。中林史朗によれば、西晉に仕えた巴蜀出身者六十七名のうち、三品まで出世できた者は、无周の弟子文立ら六名に過ぎず、六・七品の内官で起家した者も、陳壽を含めて九名しか存在しない。⁽¹⁰⁾ 賄賂を要求したが断られたのでその人の祖先の列傳を『三國志』に立てなかったなどという陳壽を貶める記述も(『晉書』卷八十二 陳壽傳)、西晉における旧蜀漢系人士への差別と無縁ではあるまい。

このように陳壽は、西晉に仕えながら不遇であった旧蜀漢系人士の立場から、三国時代を描いている。したがって、陳壽の『三國志』には、曹魏・西晉を正統としながら、旧蜀漢系人士の西晉での登用を願うという「傾き」が含まれている。諸葛亮傳は、こうした陳壽の偏向において、重要な位置を占める。諸葛亮が、政治能力に秀でるばかりでなく、家臣として劉備の遺囑に応え続け、五丈原において斃れていくまでの「忠」に溢れる生き様は、旧蜀漢系人士の西晉への仕官のプラス材料として恰好なものであったためである。

こうして陳壽の描いた諸葛亮像は、劉備との君臣関係を「忠」で貫いた「忠」臣としての姿を強調するものとなった。ここから「君臣水魚の交わり」「三顧の礼」「遺孤を託す」といった人口に膾炙している故事成語が生まれた。これらの言葉は、すべて君臣関係の厚さにその重きが置かれている。西晉で不遇であった陳壽が、旧蜀漢系人士の登用を願い、蜀漢の先達に託して描き出した像は、抜群の政治能力を持つ宰相の「忠」臣としての生き方なのであった。

2. 同時代人の諸葛亮像

それでは、陳壽が描いた「忠」臣としての諸葛亮像は、同時代人の亮像と同質なのであるだろうか。『三國志』には諸葛

亮傳以外に、魏書に二十一例、蜀書に八十九例、吳書に十三例の合わせて百二十三箇所、諸葛亮に関わる記事が掲げられている（裴注は除く）。そのほとんどは、歴史事実の記述であり、亮への同時代人の評価が窺われる事例は五例しかない。それらの検討を中心に、同時代人の諸葛亮認識を探っていくことにしよう。

諸葛亮は、丞相府を開き蜀漢の政治を総覧したが、漢中出征時には成都に丞相府の出先機関を残して、劉禪との連絡を密にしていた。その責任者である留府長史として亮に接することが多かった益州人士の張裔は、

公、賞は遠きを遺さず、罰は近きに阿らず、爵は功無きを以て取る可からず、刑は貴勢を以て免る可からず。此れ賢愚の食其の身を忘るる所以の者なり。（『三國志』卷四十一 張裔傳）

と述べ、亮の刑罰・賞与が、公平無私であったことを讀んでいる。かかる公平な政治への信頼感は、亮により罰せられた者にも及んでいた。職務怠慢と命令違反の罪を問われた李平（李嚴）は、「（李）平、（諸葛）亮の卒するを聞くと、病を發して死す」（『三國志』卷四十 李嚴傳）と亮の死を聞き、落胆のあまり病死したという。また、自分の才能を恃み、官位への不平不満が過ぎて庶人に貶された廖立も、「諸葛亮の卒するを聞くと、垂泣して歎じて曰く、『吾、終に左衽と為らん』と」（『三國志』卷四十 廖立傳）と、亮の死去による蜀漢の滅亡を予感した。これらの事例は、諸葛亮の政治が公正であり、処分された人士も、反省態度によっては復職できるとの希望を持ち続けていたことを示す。彼らは亮の死を聞いて、復職の可能性が失われたことを悟ったのである。

諸葛亮の政治能力は、敵国からも脅威とされていた。曹魏の劉曄は、蜀漢成立時に「諸葛亮は治に明らかにして相と爲る。關羽・張飛は、勇三軍に冠たりて將と爲る。蜀の民既に定まり、險に據り要を守る。則ち犯す可からず」（『三國志』卷十四 劉曄傳）と評して、蜀漢の安定性の要因の一つを、亮の政治能力の高さに求めている。同じく、曹魏の賈攢は、孫吳と蜀漢の攻め難さを述べる中で、「吳・蜀は油爾の小國と雖も、山水に依阻し、劉備は雄才有り、諸葛亮

は善く國を治む」（『三國志』卷十 賈攢傳）と、亮の國政の安定性を指摘している。諸葛亮の政治能力は、その公平な法の運用を中心に、高い評価を受けていたのである。これに対して、諸葛亮の軍事能力に対する評価は、芳しいものとは言えなかった。孫吳の大鴻臚であった張儼は、その著『默記』の中で、「空しく師旅を勞し、歳として征せざるは無し。未だ咫尺の地を進め、帝王の墓を開くこと能はず。而るに國內をして其の荒殘を受けしめ、西土を其の役調に苦しましむ」（『三國志』卷三十五 諸葛亮傳注引『默記』述佐篇）と述べ、北伐の無謀性と諸葛亮の軍事能力の低さを批判している。

また、陳壽が、あれほど諸葛亮傳で強調した「忠」臣としての諸葛亮像は、「忠武侯」という諡にもかかわらず、同時代人の亮認識には現れない。諸葛亮傳以外で君臣関係の厚さに言及するものは、南中討伐の際に呂凱が、亮は劉備から遺託を受けて劉禪を輔佐していると述べる事例のみである（『三國志』卷四十三 呂凱傳）。劉備への「忠」を尽くした家臣としては、關羽・張飛が想起されるためである。つまり、後世で強調される「忠」臣としての諸葛亮像は、西晉王朝下で蜀漢系家臣の登用を願うという「偏向」の中で描かれた陳壽の諸葛亮傳に依拠しているのである。一風変わった評価としては、軍隊指揮をしている諸葛亮を司馬懿が「名士」と評したことが伝わっている。

諸葛武侯、宣皇（司馬懿）と渭の濱に在りて、將に戦はんとす。宣皇戎服して事を莅み、人をして武侯を視はしめば、素輿に乗り、葛巾、毛扇もて、三軍を指麾し、皆其の進止に隨ふ。宣皇聞きて歎じて曰く、「名士と謂ぶ可し」と。（『藝文類聚』卷六十七 裴啓『語林』）

この記述に従えば、亮が手にしていたのは、おなじみの「白羽扇」ではなく「毛扇」となるが、いずれにせよ、戦いの最中にカジュアルな服装をして、扇で指揮をとる諸葛亮の姿を、司馬懿は「名士」と評したのである。戎服の自分が野暮に思えたのだろうか。ここには、後漢の「儒教國家」が崩壊し、多元化する価値観の中、様々な文化的価値に評価

が及び魏晉南北朝の時代的特質を見ることができ(二)る。むろん司馬懿は、亮の服装だけに興味があったわけではなく、五丈原の戦いの後、亮の陣営の跡を調査して、その整然とした状況に感嘆して、亮を「天下の奇才」と評している(三)。「三国志」巻三十五 諸葛亮傳)。

諸葛亮に対して同時代人は、公正な法の運用を典型とする政治能力を高く評価し、軍事能力については疑問視する見方も存在した。司馬懿が与えた「天下の奇才」という評語も、軍陣の営み方に対してであって、亮の作戦能力や軍事行動そのものを讃えたものではない。また、諸葛亮が死去した後にも、諡の「忠武侯」以外には、亮が君に対して「忠」であったことを顕彰する事例はない。「忠」臣としての諸葛亮像は、同時代には普及していなかったのである。政治能力が高い宰相という同時代人の諸葛亮認識と「忠」臣としての諸葛亮像の狭間には、旧蜀漢系人士の登用を願う陳壽の記述の「偏向」が存在するのである。

二、正閔論

三国時代に続く西晉・東晉、そして五胡・十六国時代を記載する正史が、唐代に編纂された『晉書』(二二)には、亮に関して四十例の記載があり、うち十九例は歴史事実であるものの、残る二十一例には多様な諸葛亮評価を見ることができ(三)る(巻末「正史における諸葛亮像の展開」を参照)。それらの中では、劉備と諸葛亮を君臣関係の手下と捉え、そこに亮の「忠」を指定する評価が八例と最も多く、同時代の諸葛亮評価に「忠」が見られなかったことと鮮やかな対比をなす。例えば、西晉末期の実力者である桓玄は、「古より亂世の君臣相ひ信する者に、燕昭・樂毅、玄德・孔明有り」(『晉書』巻八十四 劉牢之傳)と述べ、信頼で結びついた君主と臣下の典型として劉備と諸葛亮を挙げて

いる。かかる評価には、陳壽の描いた亮像が大きな影響を与えているのであろう。「吾の將軍有るは、魚の水有るが如し」(『晉書』巻一百 王彌傳)と、諸葛亮傳を典故とする記録がすでに現れている。

それとともに、東晉の歴史学が、西晉の陳壽のような諸葛亮という個人の顕彰から、蜀漢全体の正統化へと向かったことは、正統なる君臣関係として劉備と諸葛亮を宣揚する評価の背景となった。東晉の習鑿齒の『漢晉春秋』(四)は、三国の中で蜀漢を正統とする最初の歴史書で、そこでは晉は蜀漢の正統を受け継いだ王朝と位置づけられている。華北を五胡に奪われた東晉の正統化のため、曹魏により西南に押し込まれた蜀漢の正統を主張することは、正統は支配領域の多寡には関わらない、という論理を組む上で好都合である。習鑿齒が打ちあげた蜀漢正統論には、個人的偏向も背後にあったのであるが、蜀漢正統論は一人歩きを始め、蜀漢の正統を擁護する人物がこののち多く現れた。唐代の劉知幾は、『漢晉春秋』の蜀漢正統論を「近古の遺直」であると讃えている。習鑿齒は、

夫れ古今を論ずる者は、故より宣しく先ず其の爲す所の本を定め、其の致用の源を迹ぬべし。諸葛武侯は江南に龍蟠し、好を管・樂に託し、漢を匡すの望有り。是れ本を宗ぶの心有るなり。今、玄德は漢高の正曹なりて、信義當年に著はる。將に漢室の亡へるをして更めて立たしめ、宗廟の絶えたるをして復た繼がしめんとす。誰か不可と云はんや。(『太平御覽』巻四百四十七 習鑿齒「側周魯通諸葛論」)

と述べている。習鑿齒は、単に諸葛亮を讃美するのではなく、亮の行為が漢室復興という根本的な志において正しいと評価しているのである。また、蜀漢政権を正統とする立場から『後漢紀』(五)を著した東晉の袁宏は、

孔明は盤桓し、時を俟ちて動く。遐く管・樂を想ひ、遠く風流を明かにす。國を治むるに禮を以てし、人に怨讐無し。刑罰濫れず、没して餘泣有り。古の遺愛と雖も、何を以てか茲に加へん。其の臨終の願託、遺を受けて相と作るに及びては、劉后は之に授けて疑心無く、武侯は之を受けて懼色無し。繼體は之を納れて貳情なく、百姓は之を

信じて異辞無し。君臣の際、良に詠す可し。(『晉書』卷九十二 文苑 袁宏傳)

と述べ、諸葛亮の政治能力を讚美し、劉備が遺児を諸葛亮に託して疑わなかった君臣関係の美しさを賞嘆している。

また、『晉書』には、諸葛亮の政治能力を称讚する事例が四例記載されている。^(一六) 西涼の武昭王李嵩は、子供に亮の訓誠を写し与え、自己修養に充分努力するべく激励し、「周・孔の教、盡く其の中に在り。國を治むれば以て安きを致すに足り、身を立つれば以て名を成すに足れり」(『晉書』卷八十七 李玄盛傳)と語っている。

これに対して、同時代人から、むしろ貶られていた軍事能力への評価はどうか。『晉書』には軍事に関わる評価が四例伝わるが、いずれも亮の軍事的才能を尊重するものである。『晉書』卷二十四 職官志に、「(文帝)蜀破れし後に及び、(陳)枋をして諸葛亮の圍陣・用兵・倚伏の法、又た甲乙標幟を校するの制を受けしむ。枋悉く之を闇練す」とあるように、諸葛亮の軍事能力は、蜀漢の滅亡後、文帝と追尊された司馬昭が陳枋に、亮の陣立て・用兵術などを学ばせるほど重視されている。また、西晉の張輔は、樂毅と諸葛亮とを比較する中で、「夫れ孔明は文武の徳を抱き、劉玄德は知人の明を以て、屢々其の慮に造り、咨るに濟世を以てす。奇策は泉の涌くが如く、智謀は從横し、遂に東のかた孫權に説き、北は大魏に抗するに至る」(『藝文類聚』卷二十二 張輔「名士優劣論」)と述べている。張輔が「奇策は泉の涌くが如く、智謀は從横」と論じているのは、陳壽の諸葛亮評である。「變に應じるの將略は、其の長じる所に非ざるか」を意識している。西晉時代には、同時代人が疑問視した諸葛亮の軍事的才能が顕彰されるに至ったのである。

その理由は何か。諸葛亮の陣立てを学ばせた者が司馬昭であることは、それを端的に物語る。『晉書』卷二十三 樂志に、「宣の受命は、天機に應ず。……葛亮を禦ぎ、雍梁に鎮す。……威重を養ひ、神兵を運らす。亮乃ち震斃し、天下安寧たり」とあり、西晉成立時に傅玄に製作させた「樂」二十二篇の一つ「宣受命」では、亮が宣帝司馬懿の威重と神兵に斃れ、天下が安寧になったと歌われている。宣帝と追尊された司馬懿の軍事的な功績は、遼東の公孫氏を滅ぼし、

諸葛亮を防いだことにあつた。その好敵手であつた諸葛亮の軍事的才能が乏しくては、それを防いだ司馬懿の功績に傷がつこう。これが、諸葛亮の軍事能力が高く評価された一因であらう。

このほかにも、「竹林の七賢」に数えられる西晉の隋康は、友人である山濤に手紙を送り、「諸葛孔明は、元直(徐庶)に迫るに人蜀を以てせず。これ能く相ひ終始すと謂ふべし。真に相ひ知る者なり」(『晉書』卷四十九 隋康傳)と述べている。これは、徐庶が母親のために断腸の思いで劉備と別れて曹操へ降伏した時、友人であり同時に劉備の臣でもあつた諸葛亮が、あえて徐庶を止めなかつた態度を挙げて真の友情であると論じたもので、友情論においても、亮は評價の対象となっている。晉代には多様な諸葛亮像が並存していたのである。^(一七)

晉代の諸葛亮像は、多様な姿で描かれたが、正閏論を背景に君臣関係の根本としての亮像が登場し、その「忠」の顕彰が開始された点に最大の特徴がある。「忠」臣としての諸葛亮像の形成には、陳壽が『三國志』で描いた亮像が大きな影響を与えているほか、袁宏や習鑿齒といった東晉の歴史家が、蜀漢を正統とする歴史観を醸成したことを見逃してはなるまい。また、同時代人の評価を受け継ぐ政治能力への讚美と並んで、軍事能力への評価が開始されたことも注目し得る。「軍師」諸葛亮の原型は、すでに晉代から形成され始めていたのである。

三、偉大なる軍師

1. 南北朝時代の諸葛亮像

南北朝時代の正史中に諸葛亮は五十四例記載され、その中から歴史事実を除いた四十八例のうち、亮の軍事能力を評価した事例が最も多く十四例に及び、『周書』卷十七 劉亮傳に「亮勇敢を以て知られ、時の名將と爲る。兼ねて屢々

謀策を陳べ、多く機宜に合ふ。太祖乃ち之に謂ひて曰く、『卿は文武兼ね資ふ、即ち孤の孔明なり』と。乃ち名を亮と賜ひ、并せて姓の侯公莫陳氏を賜ふ」とあるように、北周の基礎を築いた宇文泰は、名将でかつ謀略に優れる部下に、諸葛亮に因む「亮」という名を与えている。亮の軍事能力に対する高い評価の証左となる。この他、戦法として「八陣の法」を採用したり（『魏書』巻五十四 高閻傳）、あるいは「木牛・流馬」を製作したことも伝わっている（『南齊書』巻五十二 文學 祖冲之傳）。また、梁の元帝に仕えて侯景と戦った陸法和は、白帝城付近で諸葛亮軍の鏃を発見して、「諸葛孔明は名将と謂ふ可し」（『北齊書』巻三十二 陸法和傳）と、亮を追懐している。南北朝時代は戦乱の時代であった。それが、亮の軍事能力を顕彰し、名将としての諸葛亮像を形作っていったのである。

一方、晉代には最多であった諸葛亮の「忠」を讀める事例は、九例とやや減じている。しかし、『魏書』巻九十三 恩倖 王叡傳に「臣聞く、『君に事ふるに忠なる者は、節義臨終に著はる。親を奉ずるに孝なる者は、淳誠垂没に表はる』と。故に孔明の軍に卒するや、蜀を全ふるの計を忘れず、曾參疾甚しく、情に善言の益を存す」と、曾參の「孝」と並んで、亮の「忠」が掲げられるように、「忠」臣の典型としての亮像も未だ健在であった。国家が興亡を繰り返す南北朝という君臣関係の転変する時代であるからこそ、より純粹な「忠」の事例として、劉備と諸葛亮との関係に高い評価が与えられたのである。また、諸葛亮の政治能力を讀めた事例は五例あり、宰相としての能力も評価されている。しかし、南北朝時代で注目したい事例は、北魏の漢人宰相である崔浩が、亮の能力を貶めているものである。南朝から北魏に降服した將軍の毛脩之と『三國志』を論じた崔浩は、

承祚の亮を評するや、乃ち故義・過美の譽有り。……夫れ亮の劉備に相たるや、……曹氏と天下を争ふこと能はず、荊州を委棄し、巴蜀に退入し、劉琰を誘奪す。……邊夷の間に僭號し、……以て管肅の亞匹と爲すは、亦過ぎざるや。……上國に抗衡し、兵を隴右に出だすも、……知窮まり勢盡き、憤攻中に結び、病を發して死す。是れより之

を言はば、豈に古の善將に合せんや。（『魏書』巻四十三 毛脩之傳）

と述べている。すなわち、崔浩は、諸葛亮の政治能力も軍事能力も、ともに陳壽の褒め過ぎであって、実際の能力は管仲・蕭何に遠く及ばないとする。これは、蜀漢の敵国である曹魏にも見られなかった諸葛亮への厳しい評価で、亮の能力の全面否定である。崔浩は、北魏の太武帝に仕えて華北統一に功績があったが、国史を編纂した際、漢人の立場から直筆したため、鮮卑人の怒りを買って殺害された漢人貴族である。それが、諸葛亮を激しく拒絶する理由は、曹魏と同じく「魏」という国号を持ち、中原を支配する北魏の崔浩が、亮と同様に中原回復を国是とする南朝から降伏した毛脩之に亮の評価を語っているという文脈から考えることができる。崔浩の政治的な立場からは、亮の行動を正統化し、高く評価することは不可能なのであった。それにしても、このように激しい亮への批判には、南北朝時代における亮像が、未だ完璧な人格として固定化されていない状況を見ることが出来る。諸葛亮像は揺れ動いていたのである。

以上のように、南北朝時代の諸葛亮像は、軍事的才能への評価にその特徴を見ることが出来る。陳壽が強調し、晉でも支配的であった「忠」臣としての諸葛亮像に加えて、軍師としての諸葛亮像が次第に確立しつつあると言える。しかし、崔浩の諸葛亮批判に見られるように、亮への評価は未だ絶対的なものではなかったことに留意しておこう。

2. 隋唐時代の諸葛亮像

隋唐時代の正史に描かれた諸葛亮は三十四例で、『諸葛亮集』の著者としての記載を除くと、最多のものは南中に關わる七事例となる。南中とは、諸葛亮が南征を行った現在の雲南省付近を指し、この地域の少数民族には現在でも亮に由来する多くの伝説が残存している。『新唐書』巻二百二十一上 南蠻傳には、「諸葛亮の石刻故より在り、文に曰く、『碑即ち仆すれば、蠻は漢の奴と爲らん』と。夷畏れ懼ひて、常に石を以て・す」とあり、諸葛亮の書いたと伝えら

れる石刻を少数民族が懸命に守っていた様子が記録されている。このような諸葛亮に因む南中の伝説と言えば、饅頭の起源を亮に求めるものが有名であるが、こつした諸葛亮伝説は、唐代すでに形成されていたのである。

また、諸葛亮の能力に関しては、文武兼才の宰相と讃えるものが二例、軍事能力の高い軍師と評するものが五例、政治能力の優秀さを説くものが三例存在する。それに対して、陳壽が強調していた「忠」臣としての亮像を描く事例は、一例しか存在せず、隋唐時代の亮像が、西晉・南北朝時代から変容していることが理解できる。さて、文武兼才の宰相と捉える見方は、『新唐書』巻九十七 魏徵傳に「帝曰く、『(魏) 徵と諸葛亮とは孰れか賢なる』と。岑文本曰く、『亮の才は將相を兼ね、徴の比す可きに非ず』と」とある。太宗李世民の諫臣として著名な魏徵も比較にならないほど、亮の才能は文武にわたると岑文本は亮を讃えたのである。太宗は納得せずに、このあと議論が続くが、ここでは、亮の軍事・政治能力への高い評価が確立していることを理解できればよい。また、軍事能力に関しては、

上元元年、太公を尊びて武成王と爲し、祭典は文宣王の比に與かり、歴代の良將を以て十哲の象と爲して坐待せしむ。秦の武安君白起・漢の淮陰侯韓信・蜀の丞相諸葛亮・唐の尚書僕射衛國公李靖・司空英國公李勣は左に列し、漢の太子少傅張良・齊の司馬田穰苴・吳の將軍孫武・魏の西河守吳起・燕の昌國君樂毅は右に列して、以て良らく配を爲す。(『新唐書』巻十五 禮樂志)

とあるように、亮は歴代の良將十名に選ばれ、軍神である太公望呂尚の侍神として祭祀を受けることになった。肅宗の上元元(七六〇)年は、安史の乱が未だ平定されておらず、唐が孔子を文宣王として祭ったことと並んで武神の太公望呂尚を祭ったのは、こつした時代背景がある。ここで諸葛亮は、孫子や呉子、韓信や張良といった錚々たる軍師達と肩を並べ、その軍事能力を国家に認められた。しかも、魏晉南北朝から選ばれた者は亮しかおらず、陳壽に軍事的才能を疑問視された諸葛亮は、魏晉南北朝最高の軍師としての地位を国家に認定されるに至ったのである。

こつした国家的な評価をもたらしたものは、多くの論者の諸葛亮讃美であった。隋朝第一の儒者と称された王通は、諸葛亮を称讃し(『文中子』巻一 王道篇)、また、諸葛亮を讃える詩文も多く作られた。『全唐詩』の中には、亮を歌った詩人五十余名の百首を超える作品が収められている。安史の乱の最中に、成都を訪れた杜甫は、諸葛亮を祭る武侯祀に至り、諸葛亮を讃える詩を詠んでいる。『全唐詩』巻二百三十 杜甫「詠懷古跡五首」の中に、

諸葛の大名宇宙に垂れ 宗臣の遺像肅として清高

三分割據籌策を紆らし 萬古雲霄一羽毛

伯仲の間に伊呂を見 指揮若し定まらば蕭曹を失せしむ

福移りて漢祚恢復し難く 志は決するも身は軍務の勞に殘く

杜甫は、諸葛亮の名声が時空を超えて輝く伊尹・呂尚の如き存在であったと讃える一方で、その悲運性も強調している。この詩には、安史の乱に際して、唐になんの貢献もできず、成都に流れ着いた杜甫個人の思い入れが深く刻み込まれており、国家のために戦いの途上で斃れた諸葛亮の生涯が、悲劇的にそれでいて美しく描かれている。また、杜甫は『全唐詩』巻二百二十六 杜甫「蜀相」では、

丞相の祠堂何れの處にか尋ねん 錦官城外柏森森たり

・に映る碧草は自ら春色 葉を隔つる黄鸝は空しく好音

三顧頻煩なり天下の計 兩朝開濟す老臣の心

出師未だ捷たざるに身先づ死し 長く英雄をして涙襟に滿たしむ

と詠み、志の途中で悲命に終わった諸葛亮は、永遠に英雄の涙を誘わずにはおかないと歌いあげている。

また、唐代憲宗朝の名宰相であった裴度は、元和二(八〇七)年二月、諸葛亮の祠堂が建立された時、「蜀丞相諸葛

武侯祠堂碑」を撰して、「(裴)度嘗て舊史を讀みて、詳らかに往哲を求むるに、或ひは君に事ふるの節を乘るも、國を開く才無く、立身の道を得るも、人を治むるの術無し。四者備はりて、兼ねて之を行ふは、則ち蜀の丞相諸葛公其人なり」(『唐文粹』卷五十五上)と著し、宰相の必須条件を諸葛亮がすべて具備していたと絶讃している。同じく宰相の地位に在った裴度は、諸葛亮の諸政策や国家運営に対し、特別な感慨と思慕の情を持ちえたのである。こうした諸葛亮への高い評価が、正史に表れた文武兼才の諸葛亮像へと繋がっていったのである。

隋唐時代には、太宗の名臣魏徵ですら亮に劣るとされるほど、亮の文武の才能は高い評価で確立していた。南北朝時代に崔浩が、亮の才能を真正面から批判したような議論は、正史には見られない。中でも、その軍事的才能は、歴代の名将十名の中に亮が含まれ祭祀を受けるほどに国家的評価が定まり、陳壽の評とのズレが大きくなっている。陳壽の描いた「忠」臣としての諸葛亮像から、偉大なる軍師としての諸葛亮像へという大きな転換が見られるのである。

3. 民衆の諸葛亮像

これまで検討してきた「官」製の諸葛亮像に対して、民衆の間に流布した諸葛亮像も、唐代には纏まりを見せてきた。早くも東晉時代には形成されていた軍師としての諸葛亮伝説は、袁希之の『漢表傳』に、

夏六月、亮は糧盡き軍還り、青封の木門に至る。(張)・之を追ふ。亮軍を駐し大樹の皮を削りて、題して曰く、「張・此の樹の下に死す」と。豫め兵をして道を夾み、數千の強弩を以て之に備へしめんとす。・果して自ら見、千弩俱に發し、・を射て死す。(『太平御覽』卷二百九十一 袁希之「漢表傳」)

とある。この説話は、もちろん諸葛亮の行為ではなく、『史記』卷六十五 孫臏傳に見える孫臏が途涓を削った木の下に射殺した故事の剽窃である。諸葛亮伝説は、他人の故事をあたかも亮が行ったかのように描くことから作成され始めた

のである。また、諸葛亮に関わる遺跡についての伝承としては、干寶の『晉紀』に、「諸葛孔明は漢中に于いて石を積み壘を爲り、方は數百歩可りにして、四郭あり、又石を聚めて八行を爲る。相去ること三丈許り、之を八陣圖と謂ふ。今に於ても儼然たり。常に鼓甲の聲有り、天陰れば彌々響く」(『諸葛亮集』故事制作篇第四 干寶「晉紀」)とあり、諸葛亮が造ったという「八陣の図」の遺跡から、軍鼓やよるいのぶつかり合う音が聞こえてくるといふ民間伝承を書き記している。諸葛亮の軍事能力は神秘的であるという民衆の諸葛亮観が、こつた伝承を作り上げているのである。

唐代に入ると、仏教寺院で行われた「俗講」の中で、三国時代の物語が語られるようになった。そうした中、諸葛亮に関する故事も纏められ、その一部が現存している。唐代玄宗朝の杭州華嚴寺の沙門大覺が撰した『四分律鈔批』の注釈には、諸葛亮の「死せる諸葛生ける仲達を走らす」の故事が引用されており、仏教寺院で民衆を対象に語った諸葛亮説話の残存を『續藏經』第一輯第六十八套第一冊第十五葉にある『四分律鈔批』の注釈より検討することができる。

蜀に智將有り、姓は諸葛名は高(亮)字は孔明、王(劉備)の重する所と爲る。劉備毎に言ひて曰く、「寡人の孔明を得たるは、魚の水を得たるが如し」と。後乃ち劉備魏を伐つに、孔明兵を領して魏に入る。魏國蜀と戦ふ。諸葛高(亮)時に于いて大將軍と爲り、謀策に善然たり。魏家は唯だ孔明を惧れ、敢へて前進せず。孔明病を致し死に垂んとするに因りて、諸人に語りて曰く、「主弱くも將強きは、彼の難かる所と爲る。若し我が死を知らば、必ず彼の我(伐)に建(遣)ふ。吾死して已後、一・の土を將て、我が脚下に置き、鏡を取りて我が面を照す可し」と。言已わり氣絶ゆ。後此の計に依り、乃ち孔明を將て營内に置き、幕に于いて之を圍み、劉家夜中兵を領して還り退き蜀に歸る。彼の魏國に卜を善くする者有り、意轉た判じて云ふ、「此の人未だ死せず」と。「何を以て之を知る」「土を踏み鏡に照す、故に未だ死せざるを知る」と。遂に敢へて交戦せず。劉備兵を退けて蜀に還る。一月餘日にして、魏人方めて知り、尋いで往きて之を看るに、唯だ死人を見るのみにして、軍兵盡く

散す。故に難を免がるを得たるは、孔明の策なり。時人言ひて曰く、「死せる諸葛亮、生ける仲達を怖れさす」と。仲達は是れ魏家の將なり、姓は司馬、名は仲達、亦云ふ、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」と。其れ孔明に志量有り、時人號して臥龍と爲す、甚だ劉氏の敬重を得たり。

この説話の第一の特徴は、諸葛亮の軍事能力の高さが強調されている点にある。それを分かり易くするために、蜀漢の軍事行動は、すべて亮と結びつけられて語られている。説話の中で亮は大將軍であるが、亮は言うまでもなく丞相である。丞相という文官の最高位よりも武官の最高位である大將軍の方が、軍事能力を発揮するのに相応しいと考えられたのであろう。史実が分かり易く変更されている。また、劉備が曹魏を討伐した際、「孔明兵を領して魏に入る」とあるが、これも史実にはなく、劉備が漢中で曹魏と戦った際、從軍して軍師となつた者は法正であり、亮は後方で物資の調達や行政に専念していた。因みに、亮の死後「劉備兵を退けて蜀に還る」とする部分も史実とは異なっている。

第二の特徴は、諸葛亮の智謀を際立たせるために、亮の能力の神秘化が行われていることである。「死せる諸葛生ける仲達を走らす」の故事は、すでに習鑿齒が『三國志』卷三十五 諸葛亮傳注引『漢晉春秋』に、

楊儀ら軍を整へて出づ、百姓奔りて宣王(司馬懿)に告げ、宣王焉を追ふ。姜維儀をして旗を反し鼓を鳴らしめ、將に宣王に向かはんとする者の若くす。宣王乃ち退却し、敢へて入らず。是に於いて儀陳を結びて去り、谷に入り然る後に喪を發す。宣王の退くや、百姓之が爲に諺して曰く、「死せる諸葛生ける仲達を走らす」と。

と書き記している。ここでは、司馬懿を走らせた者、つまり軍隊を返して司馬懿を驚かした者は、あくまで姜維・楊儀であった。そこに諸葛亮の遺言があつたにせよ、司馬懿を走らせた行為の主体は、諸葛亮ではなかつたのである。

ところが説話では、諸葛亮が生前司馬懿の追撃を予言し、その対策に、一盛り土を足もとに置き鏡に顔を映した結果、司馬懿が追撃できなかったことになっている。つまり、司馬懿を走らせた主体は、亮なのである。そこには、姜維

も楊儀も存在せず、彼らに脅かされた司馬懿の遁走もなく、かえつて「仲達を走らす」の意味が伝わり難くなっている。そのままでは、この説話が入れたかつた内容は、自己の死すらも隠し通せる卓絶した諸葛亮の智謀であつた。神秘的な智謀を身につけた鬼神のような軍事的才能に溢れる軍師、それが民衆が喜ぶ諸葛亮像であつたのである。

第三の特徴は、諸葛亮の行動に精彩を添えるために、他の登場人物の格下げが始まっていることである。具体的には、劉備の格下げが著しい。史実では、亮は劉備の軍事能力を信頼し、劉備の生前に亮が軍隊の指揮を取ることにはなかつた。ところが、説話において亮は「主弱くも將強きは、彼の難かる所と爲る」と明言している。失礼な話である。亮の活躍を強調するため、劉備はだんだん木偶の坊にされていき、『三國志演義』では、何にもしないで泣いてばかりいる君主になつてしまつたのであつた。

以上のように、唐代の仏教説話に残存する諸葛亮像は、史実と異なるだけでなく、「官」製の諸葛亮像とも明確に異なっている。民衆にとつての諸葛亮は、超人的な能力を発揮する軍師であることが第一義的な存在なのである。弱い君主を助けて鬼神の如き活躍をしながら悲運にも斃れていく軍師、それが唐代の民衆が望んだ諸葛亮像なのであつた。

四、「忠義」の臣と神仙と

1. 宋元時代の諸葛亮像

『新五代史』から『元史』までの正史に現れた諸葛亮は四十七例、その中では軍事能力に関わる事例が十四例と最も多く、この時代の諸葛亮像の第一の特徴となつている。軍事に関わる話柄が多い理由は、戦乱が続いたこの時代の国際情勢に求められる。金の攻撃に英雄的な抗戦を続けた岳飛に対して、南宋の高宗は、『宋史』卷三百六十五 岳飛傳に、

「帝（高宗）手すから曹操・諸葛亮・羊躰の三事を書して之に賜ふ。（岳）飛其の後に跋するや、獨り操を指して姦賊と爲して之を鄙しむ、尤も（秦）檜の惡む所なり」とあるように、諸葛亮の事跡を手すから写して岳飛に賜っている。その際、高宗が曹操と羊躰の事跡も同時に賜与したように、亮の軍事的才能だけが取り立てて評価されたわけではない。しかし、『孫子』に注をつけた兵法家の曹操と同列であれば充分であり、亮は三国時代の名将として安定した評価を受けていると言えよう。『宋史』卷二百七 藝文志に『諸葛亮行兵法』五卷や『諸葛亮將苑』一卷など、亮を冠した偽書が著録されることは、諸葛亮の名を騙って兵法を説くもの多さを物語る。

また、政治能力に関する事例は九例統いて多く、亮に託して現実の政治が批判されている。あるいは、道士としての亮像も四例現れる。『宋史』卷二百六 藝文志には『諸葛亮十二時風雲氣候』一卷という亮に仮託した道教系の書物も著録されている。これは、亮を神仙と捉える民衆の諸葛亮像の反映と考えられ、六例現れた祭祀の事例とともに、諸葛亮の民間における神格化が進行していることを裏付ける。

それ以上に、宋代の諸葛亮像の特徴となるものは、「忠」という徳目に収斂されるような、理想的な君臣関係として劉備と諸葛亮を捉える事例が七例存在することである。隋唐には一例に減じていた君臣関係が、この時代には復活したのである。先掲した岳飛傳の論には、「（岳）飛は自ら表を爲り詔に答へ、忠義の言、肺腑より流出するは、眞に諸葛孔明の風有るも、卒に秦檜の手に死す」（『宋史』卷三百六十五 岳飛傳）とあり、岳飛の「忠義」の言には諸葛亮の風があったとされる。君主への「忠義」を尽くした臣下の代表として諸葛亮が捉えられていることを理解できよう。また、王安石と神宗との関係について、『宋史』卷三百二十七 王安石傳は「帝（神宗）（王）安石を坐に留めて曰く、『卿と従容として論議せんと欲すること有り』と。因りて言つ、『唐の太宗は必ず魏徵を得、劉備は必ず諸葛亮を得、然る後以て爲すこと有る可し。二子誠に不世出の人なり』と」と伝える。神宗は、唐の太宗における魏徵、劉備における諸葛

亮を不世出の政治家と捉え、両者のような君臣の信頼関係に基づいて、王安石に新法政治を推進させたのであった。かかる亮像の復活には宋学の勃興がある。宋学は、亮の行為が大義名分が貫かれているのかという問題を議論した。それは亮に厳しい議論であつたが、これにより最終的に「忠義」の臣としての亮像が確立したのである。北宋の程頤は、「孔明王佐の心有れども、道則ち未だ盡くさず。王者は天地の私心無きが如く、一の不義を行ひて天下を得るは爲さざるなり。孔明必ず成す有るを求め、而して劉璋を取る。聖人は寧ろ成す無きのみ、此れ爲す可からざるなり」（『二程全書』遺書二十四）と亮を批判する。大義名分論では、劉備が入蜀の際、だまし討ちで同姓の劉璋から益州を奪つたことは容認できないのである。劉璋の打倒に手を染めた者は当初は途統、その死後は法正であつた。しかし、亮は「草廬対」の中で益州を取ることを既定路線としており、程頤はそこに亮の私心を認め、厳しく亮の行為を批判したのである。

それでは、諸葛亮はどのように行動すれば大義名分を貫いたのあろうか。この問題について、「赤壁の賦」で名高い北宋の蘇軾は「諸葛亮論」を著し、『蘇東坡全集』前集卷四十三「諸葛亮論」で、次のように論じている。

之を取るに仁義を以てし、之を守るに仁義を以てするは周なり。之を取るに詐力を以てし、之を守るに詐力を以てするは秦なり。秦の取る所以を以て之を取り、周の守る所以を以て之を守るは漢なり。仁義・詐力、雜用して以て天下を取らんとするは、此れ孔明の失なふ所以なり。曹操袁に因り危に乘じ、其の姦を逞しくするを得。孔明之を恥じ、大義を天下に信べんと欲す。此時に當りて曹公の威四海に震ひ、東は許・・に據り、南は荆・豫を収む。孔明の恃みて以て之に勝る所のものは、獨り其の區區の忠信を以てのみなり。以て天下の心を激する有るのみ。夫れ天下の廉隅節・、慷慨死義の士、固より曹氏に心服するに非ず。特だ威劫を以て彊ひて之を臣とするのみ。孔明の風を聞かば、直しく千里の外に響應する者有るべし、此の如ければ則ち措足の地無しと雖も、而れども天下固より之が用を爲す。且つ夫れ一不義を殺して天下に爲さざる所有るを得、而る後天下の忠臣義士樂しみて之が爲に死せ

んとす。劉表の喪びしとき、先主荊州に在り、孔明其の孤を襲殺せんと欲するに、先主忍びず。其の後劉璋好を以て之を逆へ蜀に至らしむ。數月にならずして其の吭を扼し、其の背を拊ちて、之が國を奪ふ。此れ其れ曹操と異なること幾希なり。曹操の敵せざるは、天下の知る所なり。兵を言へば曹操の多きに若かず、地を言へば曹操の広きに若かず、戦を言へば曹操の能に若かず、而るに一以て之に勝る者有りとせば、區區の忠信のみ。孔明、劉璋を遷して既に天下の義士の望を失ふ。乃ち始めて治兵振旅して、仁義の師と爲り、東甯長驅し、天下の嚮応を欲す。蓋し已に難きなり。曹操既に死し、子の丕代はりて立つ。此の時に當り、以て計破すべきなり。何となれば、操の臨終のとき、丕を召して之を植に屬するに、未だ嘗て譚・尚を以て戒と爲さずんばあらざるなり。而るに丕と植は、終於に相殘すること此の如し。此れ其れ父子兄弟すら且つ寇讐を爲す、而るを況んや能く天下の英雄の心を得るを以てするをや。此れ聞すべきの勢にして、數十萬金を捐ふるに過ぎず。其の大臣骨肉をして、内に自ら相殘し、然る後兵を擧げ之を伐たしむ。此れ高祖の項籍を滅ぼす所以なり。

蘇軾の言つ通り、曹丕・曹操の対立に付け込んで内部分裂を誘い、一挙に曹操を滅ぼせば、諸葛亮の大義名分は立つたであろうか。そのための前提として、やはり益州は必要であり、劉璋を滅ぼさざるをえないのではないか。蘇軾の議論は、今一つ空回りをしている感がある。それは、劉璋を滅ぼした行為が大義名分論から許容できないという線は譲れないにしても、それでも何とか諸葛亮に天下を統一させたい、という蘇軾の亮への思い入れがあるためではないか。蘇軾は亮の行為を、崔浩のように全面的に否定してはいない。「出師の表」について蘇軾は「諸葛孔明は文章を以て自ら名ならず、而るに物を開き務めを成すの姿、名實を綜練するの意は、自ら言語に見はる。出師の表に至りては、簡にして盡くせり。直にして肆せず。大いなる言かな。伊訓・説命と相ひ表裏するものなり」(『蘇東坡全集』前集卷二十四)と評価している。その政治行動についても、亮が漢の再興を掲げ蜀漢を建国したことを批判しているのではない。その

目的の崇高であるがゆえに、かえって漢室に連なる同姓の劉璋を滅ぼした不義を見逃せないのである。

ところが南宋になると、亮への評価は一変する。朱熹は、諸葛亮を高く評価するが、やはり程頤が提出した問題は、大義名分論から容認できず、劉璋にその罪をなすりつけている。『朱子語類』卷一百三十六 歴代三に「程先生云、孔明王佐の心有れども、然るに其の道則ち未だ盡くさず」と。其の論極めて當れり。……諸葛孔明は天資甚だ美にして、氣象宏大なり。……劉璋を取るの一事は、或ひは以爲へらく先主の謀にして、未だ必ずしも是れ孔明の意ならざらん」とある。劉璋への攻撃は「草廬対」以来の亮の持論である。それを劉璋の策謀であつて亮の意思ではないとするのは、夙願の引き倒しにも思われる。結局、朱熹の亮評価は「三代より下、義を以て之を爲すものは、ただ一箇の諸葛孔明有るのみ」(『朱子語類』卷一百三十六 歴代三)となる。それは、金に江南へ押し込められた南宋では、亮と同様「中原回復」が國是であつた。金を滅ぼして華夷の別を正すこと、これが朱熹にとって何よりも優先すべきことであつた。東晉で蜀漢正統論が最初に主張されたように、江南に偏在する南宋の朱熹は、劉璋を滅ぼした不義を見逃しても、「中原回復」を目指す亮の行為を正統化する必要性があつたのである。こうして朱熹は、『通鑑綱目』の中で蜀漢を正統として三國時代を記述し、「義」としての側面をも諸葛亮像に加えることによって、「忠義」の家臣としての諸葛亮像を確立したのである。これが、この時代の正史に「忠」臣の亮像が復活した背景なのであつた。

2. 『三國志平話』

宋代には都市の発達を背景に、民衆に三國の故事を語る文学は、一層の発達を遂げた。「説三分」と呼ばれる三國志語りの台本として元代に作成された『三國志平話』からは、当時の民衆が期待した諸葛亮像を理解することができる。⁽¹¹⁾『三國志平話』巻中では、諸葛亮は登場の部分から神仙として描かれている。

諸葛は本是れ一神仙、小より業を學び、時に中年に至りて、書として覽ざるは無く、天地の機に達す。神鬼度り難きの志は、風を呼び雨を喚び、豆を撒きて兵と成し、劍を揮いて河と成す。司馬仲達曾て道ふ「來はす可からず、は守る可からず、因は圍む可からず、未だ是れ人なるか、神なるか、仙なるかを知らず」と。

亮の好敵手である司馬懿の口を借りて、人であるか、神であるか、仙人であるか分からないと言われている諸葛亮は、豆を撒いて兵を作り、風をおこし雨を降らせる。かかる亮像は様々な道術を使いこなす『三國志演義』の諸葛亮像の原形である。また、諸葛亮は死去の際、神人を使者として司馬懿に遣わし、三國の行く末と司馬炎の中國統一を予言する。當夜に至り、狂風過る処、一神人を見るに言ふ、「軍師我をして來りて書を送らしむ」と。司馬（懿）接けて見るに、書中の意に略ぼ云ふ、「吾死するも、漢の天命尚ほ三十年有り、若し漢亡べば、魏も亦滅び、呉之に次ぐ、尔の宗必ず一統有り。若し尔迷を執り妄拏せば、禍は尔に及ぶなり」と。司馬看罷はり、従はざるの意有り。神人大喝す。司馬諾々として言ひて曰く、「願はくば軍師の令に従はん」と。此れ従り司馬各々邊疆に立ち、漢と鋒を爭はず、朝に遷る。（『三國志平話』下巻）

『三國志平話』に現れた諸葛亮像の最大の特徴は、その神仙化にある。諸葛亮は天候を操り、神人を使者として未来を予言する。諸葛亮の神格化もここに極まれり、といった感じで、かえって荒唐無稽で空しく、文学としての完成度は低いと言わざるをえない。しかし、留意したい点は、『三國志平話』において亮が「莊農」出身、あるいは「村夫」と表現されることである（『三國志平話』巻中）。民衆は亮を自分の階層出身とすることで、亮を自分達の代表とした。亮が持つ万能の能力は、無力な民衆の鬱憤を晴らすものなのである。亮はどんな病気でも治す良医としても描かれる（『三國志平話』巻下）。病気に苦しむ民衆が、亮に自分たちの希望を託したことを、ここにも見ることが出来る。『三國志平話』において、民衆の描いた諸葛亮像は、智謀に優れ必ず勝利を納める卓絶した軍師で、天候を操り奇術を使い

どんな病気も治す農民出身の神仙なのであった。諸葛亮は、民衆の雑多な願望をすべて叶える超人的な神仙になったと言つことができよう。

五、「官」「民」の融合

元末明初の羅貫中がまとめた『三國志演義』は、『三國志平話』や民間の雜劇を種本としながら、『三國志』や『資治通鑑』などにより、物語の史実化に努めたものである。^(四) ここでは、忠義の臣としての「官」製の亮像と、『三國志平話』に見られた万能の神仙という民衆の亮像は、『三國志演義』の中でいかなる位置づけをされているのであろうか。

『三國志演義』第八十五回「劉先主詔を遣して孤兒を託し 諸葛亮安居して五路を平らぐ」は、劉備が死に臨み、亮に劉禪を託す場面であり、「官」製の諸葛亮像が着目することの多かった劉備と亮の君臣関係が描かれている。

最初に亮が登場する場面は、間接的だが、馬良が亮の手紙を持つてくる部分である。史実の諸葛亮は、劉備が孫呉と戦つことを傍観したのだが、『三國志演義』では第八十一回で趙雲とともに亮も劉備の東征を止めている。しかも、亮の軍事能力を宣揚し、主君の敗戦を傍観したという印象を与えないため、劉備の陣形を伝え聞いた亮が劉備の敗北を予見し、それを防ぐために馬良を派遣して劉備に連絡を取ろうとしたが間に合わなかったという虚構を作成して、劉備敗北の際の亮の立場を擁護しようとしているのである。ここに描かれた諸葛亮は、『三國志』や「官」製の諸葛亮像ではなく、劉備が行う戦闘をすべて指揮して勝利に導く神仙の如き軍師という民衆の諸葛亮像を基底にしている。

続いて亮が登場する場面は、劉備がその最期を悟り、死後の大事を亮に託す部分である。引用すると、

且説きなん、孔明永安宮に到るや、先主の病危きを見、慌忙して龍榻の下に拜伏す。先主旨を傳へ、孔明に請ひて龍榻の側に坐せしめ、其の背を撫して曰く、「朕自ら丞相を得て、幸にも帝業を成せり。何ぞ智識淺陋にして、丞

相の言を納れず、自ら其の敗るるを取るを期せん。悔恨して疾を成し、死は旦夕に在り。嗣子は孱弱、大事を以て相託さざるを得ず」と。言訖り、涙流れて面に満つ。孔明も亦た涕泣して曰く、「願はくば陛下龍體を善保し、以て天下の望に副はれんことを」と。先主目を以て遍視するに、只だ馬良の弟馬謖の傍に在るを見れば、先主令して且く退かしむ。謖退出す。先主孔明に謂ひて曰く、「丞相馬謖の才を觀るに、何如」と。孔明曰く、「此人は亦た當世の英才なり」と。先主曰く、「然らず。朕此の人を觀るに、言は其の實に過ぎ、大用す可からず。丞相宜しく深く之を察すべし」と。分付すること畢り、旨を傳へ諸臣を召して殿に入らしめ、紙筆を取りて遺詔を寫したるや、孔明に遞へ與へて歎じて曰く、「朕書を讀まざれども、粗ぼ大略を知る。聖人云ふ、『鳥の將に死せんとするや、其の鳴や哀し。人の將に死せんとするや、其の言や善し』と。朕は本より卿等と共に曹賊を滅ぼし共に漢室を扶けんことを待つも、不幸にして中道にして別る。丞相を煩はし詔を將て太子禪に付與し、以て常言と爲すこと勿らしめん。凡事は更丞相の之に教ふるを望む」と。孔明等地に泣拜して曰く、「願はくば陛下將て龍體を息はれんことを。臣等盡く犬馬の勞を施し、以て陛下知遇の恩に報ゆるなり」と。先主内侍に命じて孔明を扶け起さしめ、一手は涙を掩ひ、一手は其の手を執りて曰く、「朕は今死す。心腹の言有り相告げん」と。孔明曰く、「何の聖諭有るか」と。先主泣きて曰く、「君の才は曹丕に十倍す、必ず能く邦を安んじ國を定め、終に大事を定めん。若し嗣子輔け可くんば、則ち之を輔けよ。如其れ不才なれば、君自ら成都の主と爲る可し」と。孔明聽き畢り、汗流れて體に遍く、手足は措くところを失ひ、地に泣拜して曰く、「臣安んぞ敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を盡し、之に繼に死を以てせざらんや」と。言訖り、叩頭して血を流す。先主又た孔明に請ひて榻上に坐せしめ、魯王劉永・梁王劉理を喚び近づき前ませ、分付して曰く、「爾等皆朕が言を記せ。朕亡きの後、爾ら兄弟三人、皆以て丞相に父事し、怠慢す可からず」と。言罷め、遂に二王に命じ同に孔明を拜せしむ。二王拜し畢り、孔明曰く、「臣肝腦地

に塗ゆると雖も、安んぞ能く知遇の恩に報ひんや」と。先主衆官に謂ひて曰く、「朕は已に孤を丞相に託し、嗣子をして以て之に父事せしむ。卿等俱に怠慢し以て朕の望に負く可からず」と。……言ひ畢り、龍崩す。壽六十三歳。諸葛亮と対面した劉備は、最初に亮の言つことを聞かずに敗戦したことを詫びるが、これは亮が東征に反対したという虚構の辻褃合わせである。続いて劉備は、馬謖の才能を疑問視し、重用しないように忠告するが、これは『三國志』卷三十九 馬良傳附馬謖傳の記載通りである。『三國志平話』の臨終場面にはこの部分はなく、『三國志演義』が史実化の方向で洗練されていることを理解できよう。劉備は太子劉禪に宛てた遺詔をしたためたのち、いよいよ諸葛亮に孤を託すことになる。『三國志平話』では、この部分は

先主曰く、「軍師周公旦の成王を抱くの説を聞かずや」と。帝又言つ、「阿斗は年幼く、君爲るに堪へず。立つに中らば則ち立て、如し立つに中らざれば、軍師即ち自ら之と爲れ」と。武侯告げて曰く、「臣亮何ぞ德行有らん。今陛下孤を託し、殺身」と。太子跪き前進して後ち拜す。帝曰く、「太子但だ公事有らば、軍師をして意に會する者あらしめよ」と。言訖り帝崩す。六十四歳。(『三國志平話』卷下)

とあり、たしかに劉備が亮に劉禪を託している。その際に劉禪は年少であるため、亮が代わって君主になれと劉備は述べるが、記述はあっさりしたもので、君臣の信頼関係であるとか、忠義を尽くす最期の約束であるといった感動を呼ぶ場面は未成熟である。劉備が遺児を託す誓えとしている周公旦の話柄も、『三國志』とは異なっている。

これに対して、『三國志演義』では史実化を進めながらも、見事な演出を施している。劉備が亮の才能を曹丕に十倍するものとし、劉禪に才能がなければ代わって即位してほしいという遺言を残し、亮がそれに対して涙を流して忠誠を誓う部分は、『三國志』卷三十五 諸葛亮傳をそのまま使用している。続く、劉永・劉理に向かって、諸葛亮を父と思つて仕えよと諭す部分も、『三國志』に記載されている。^(註) 一般に馴染みの深い周公旦を出して、劉備が亮を説得しよう

とする『三國志平話』に比べ、手堅い史実化と言えよう。しかし、『三國志演義』の特徴は、次の部分にこそある。続く「臣肝腦地に塗ゆると雖も、安んぞ能く知遇の恩に報ひんや」という亮の返答は、『三國志演義』の創作である。これが入ることによって、諸葛亮が五丈原で陣没していく史実がオーバーラップされ、亮の戦死が劉備の遺託に応えるものであったこと、亮が劉備に死ぬまで「忠義」を尽くしたことが強調されるのである。見事な演出というほかはない。『三國志演義』は、『三國志』を典拠として史実化を進めながら、すべてを史実にするのではなく、僅かの虚構を加えることにより、ある部分を誇張するという技法を取っている。ここで誇張されたのは、亮の劉備への「忠義」である。つまり、「官」製の亮像である「忠義」の臣下としての亮像が、巧みな演出によって強調されているのである。

それでは、『三國志演義』のすべてにわたって「官」製の亮像が基底とされたのであろうか。民衆の間で語られてきた「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」の故事は、『三國志演義』ではどのように描かれているのであろうか。民衆の亮像の転変を亮死去の場面から考察していこう。

第百四回「大星隕ちて漢の丞相天に歸し 木像を見て魏の都督胆を冷やす」は、亮が自分の寿命を延ばす祈禱をする場面から始まる。病気を治す民衆の亮像の延長と言えようか。『三國志』にはもちろん登場しない諸葛亮である。ただし、この諸葛亮は、祈禱の失敗に際して、火を踏み消した魏延を責めず、寿命が尽きようとしていると合理的に説明している。この点において、超人的な能力を持つ神仙という民衆の亮像そのものではないことに留意しておきたい。

続いて、亮は後主に最後の上奏文をしたためる。その後半部分は、ほぼ『三國志』巻三十五 諸葛亮傳の記載の通りで、「ここにも史実化を認めることができる。しかし、前半部分で「死の將に至らんとするに、願はくば愚忠を盡さん」とを」と、後主への「忠義」を強調している部分は『三國志演義』の創作である。ここにも、史実化に努めながらも「忠義」な臣下としての亮像を描くという『三國志演義』の基本方針を見ることができよう。

いよいよ諸葛亮が死後の備えをする部分である。引用すると、

孔明罵し畢り、又た楊儀に囁して曰く、「吾死するの後、喪を發す可からず。一大龕を作り、吾が屍を將て龕中に坐せしめ、米七粒を以て、吾が口内に置き、脚下に明燈一盞を用ふ可し。軍中の安靜なること常の如くし、切に哀を擧ぐる可勿れ。則ち將星は墜ちず。吾が陰魂更めて自ら起きて之を鎮む。司馬懿は將星の墜ちざるを見、驚疑するに必然たり。吾が軍は後寨をして先行せしめ、然る後に一營一營緩緩として退く可し。若し司馬懿の來たり追はば、汝陣勢を布成し、旗を回し鼓を返す可し。他の來たり到るを等ち、却て我が先時に離る所の木像を將て、車上に安じ、軍前に推し出だし、大小の將士をして、左右に分列せしめよ。懿之を見なば必ず驚走せん」と。楊儀一領諾す。是の夜、孔明人をして扶け出ださしめ、北斗を仰觀し、遙かに一星を指して曰く、「此れ吾の將星なり」と。衆之を視れば、其の色昏暗にして搖搖として墜ちんと欲するを見る。孔明劍を以て之を指し、口中に念咒す。咒畢り急ぎ帳に回りし時、人事を省す。

死後口に米を七粒入れ、足元に一基の灯明を置くことにより魂が帰ってきて將星を静めるという『三國志演義』の文章は、前掲した唐代の仏教的説話に、鏡をおいて顔を照らし土を踏ませて生きているように思わせる、とあつた部分の完成形態である。亮の魂が死後に星を操るのであるから、かなり神秘化が進んでいると言えよう。亮を万能の神仙と捉える民衆の亮像が『三國志演義』に踏襲されている部分と考えられる。続いて、臨終の間際に李福がやってきて亮に後継者を尋ねるが、これは『三國志』巻四十五 楊戲傳附季漢輔臣贊注引『益部書舊記』の記載通りである。そして、司馬懿を走らす場面へと展開する。引用すると、

却説きなん、司馬懿夜に天文を觀、一大星あり、赤色にして、光芒に角有り、東北方より西南方に流れ、蜀營内に墜ち、三投再起し、隱隱として聲有るを見る。懿驚喜して曰く、「孔明死せり」と。即ち傳へて大兵を起して之を

追はしめ、方に寨門より出でんとして、忽ち又た疑慮して曰く、「孔明は善く六丁六甲の法を會す。今我の久しく戦に出でざるを見るが故に此の術を以て死を詐り、我を誘ひて出ださんとするのみ。今若し之を追へば、必ず其の計に中らん」と。遂に復た馬を勒して寨に回り出です、只だ夏侯霸をして暗に數十騎を引き、五丈原の山僻に往きて消息を哨探せしむ。……

却説きなん、夏侯霸軍を引きて五丈原に至りて看し時、一人を見ず、急ぎ回りにて司馬懿に報じて曰く、「蜀兵は已に退き盡きぬ」と。懿跌足して曰く、「孔明眞に死せるか、速かに之を追ふ可し」と。夏侯霸曰く、「都督は輕く位く追ふ可からず。當に偏將をして先に往かしむべし」と。懿曰く、「此の番は須らく吾れ自ら行くべし」と。遂に兵を引きて二子と共に、一齊に五丈原に殺奔し來たる。呐喊して旗を揺がせ、蜀寨に殺入せし時、果して一人も無し。懿二子を顧みて曰く、「汝急ぎ兵を催し枯ひ來たれ、吾れ先に軍を引きて前進せん」と。是に於て司馬師・司馬昭は後に在りて軍を催し、懿は自ら軍を引きて先に當り、追ひて山脚の下に到れば、蜀兵の遠からざるを望見し、乃ち力を奮ひて追ひ枯ふ。忽然として山後に一聲・響し、喊聲大ひに震ひ、只だ蜀兵の俱に旗を回し鼓を返すを見る。樹影中に中軍の大旗を飄出し、一行の大字を上書して曰く、「漢の丞相武侯諸葛亮」と。懿大いに驚き色を失ひ、睛を定めて看し時、只だ軍中の數十員の上將、一輛四輪の車を擁出し來たり、車上に端坐せる孔明は、綸巾羽扇、鶴氅皂茂なるを見る。懿大いに驚きて曰く、「孔明尚ほ在りや、吾れ輕く重地に入り、其の計に墮ちたり」と。急ぎ勒して馬を回し便ち走く。背後に姜維、「賊將走くる休れ、低は我が丞相の計に中り了りぬ」と大叫せば、魏兵は魂飛び魄散じ、甲を棄て据を・し、戈を抛ち戟を・て、各々性命を逃れて、自ら相踐踏し、死する者無數なり。司馬懿奔走し了ること五十餘里、背後の兩員の魏將枯上し、馬の嚼環を・住して叫びて曰く、「都督驚く勿れ」と。懿手を用ひて頭を摸して曰く、「我が頭有りや否や」と。二將曰く、「都督怕ること休れ、蜀

兵遠きに去り了りぬ」と。懿は喘息半瀕して、神色方に定まる。目を眇へて之を視れば、乃ち夏侯霸・夏侯惠なり。乃ち徐徐に轡を按じ、二將と小路を尋ねて本寨に奔り歸り、衆將をして兵を引きて四散して哨探せしむ。兩日を過しり、郷民奔り告げて曰く、「蜀兵谷中に退入せし時、哀聲地を震はし、軍中白旗を揚起す。孔明果然として死し了りぬ。姜維を止留して一千兵を引きて後を斷たしむ。前日車上の孔明は、乃ち木人なり」と。懿歎じて曰く、「吾れ能く其の生を料るも、其の死を料ること能はざるなり」と。此に因りて蜀中の人諺して曰く、「死せる諸葛能く生ける仲達を走らす」と。

「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」という故事は、習鑿齒が『漢晉春秋』に初めて記録したが、そこでは、司馬懿を走らした者は姜維や楊儀であった。それが唐代の『四分律鈔批』では、足もとに土を置き鏡に顔を映すことにより、蜀漢は撤退できたとされたが、「司馬懿を走らす」行為としては、いまひとつ説得力を欠くものとなった。

これに対して『三國志演義』では、天文を觀ていた司馬懿が亮の死を天文より察知しながらも、亮の「六丁・六甲の法」を警戒しながら追撃するという設定が最初に行われ、なぜ亮の木像を見て司馬懿が逃げ出したのかという伏線を設けている。そのうえで、追撃してきた司馬懿を姜維が迎え撃ち、木像を見た司馬懿が仰天して逃げ出す模様が周到に描かれ、亮が生前に立てた計略によって、「死せる諸葛」がいかに「生ける仲達」を走らせたのか、という経緯が合理的に語られる。ここで描かれる諸葛亮は、不可能なことなど何も無い神仙としての亮ではない。人間としての亮が精一杯の計略により、いかに司馬懿を欺いたのかという計略が極めて綿密に描かれ、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」という故事が見事に説明されているのである。

『三國志演義』において、いかなる亮像が描かれているのかという問題に関して、劉備・諸葛亮という二人の死の場面に描かれた亮像を検討した結果、前者には史実化の中にも「官」製の亮像が色濃く現れ、後者には民衆の理想化した

神仙としての亮像を基底として、史実化や合理化が行われ、さらに「忠義」を尽くす「官」製の亮像が織り込まれていた。『三國志演義』に描かれる亮像は、超人的な能力を発揮する軍師諸葛亮が中心である。しかし、『三國志演義』の諸葛亮は、民衆の亮像そのものではない。民衆の亮像を基底に持ちながらも、可能なかぎりそれを史実化し、さらには「官」製の亮像である「忠義」の家臣としての諸葛亮を加えようとしたものであった。前者は、こうした傾向が明確に顕在化した事例と考えることができるのである。

一方、『三國志演義』が通行していた明清時代の正史に現れた諸葛亮は二十二例であり、祭祀に関わる七例が最多となる。南中に関わる事例も四例あり、『明史』巻二百十二 劉顯傳に「相ひ傳ふるに、『諸葛亮鼓を以て鑿を鑿む。鼓失なればなば、則ち鑿の運終わりぬ』と」とあるような「諸葛鼓」伝説も記載され、南中で独自の諸葛亮の神格化と伝説化が展開されていることが分かる。また、亮の政治能力を評価するものは三例、軍事能力は二例、君臣関係は三例と引き続き諸葛亮は、政治・軍事に秀でた忠義の臣として安定した評価を受けている。先述した祭祀の事例の多さと併せ考えると、「官」の側からの亮の神格化の進行を窺うこともできよう。

優れた儒者宰相としての諸葛亮像も二例見られる。『清史稿』巻二百六十六 葉方鵠傳に「(葉方鵠)通鑑を進講するに、上(順治帝)問ふ、『諸葛亮は伊尹に何如ん』と。方鵠對入て曰く、『伊尹は聖人、孔子に比す可し、諸葛亮は大賢、顔淵に比す可し』と」とあるように、亮は孔子の高弟顔回に比されている。李贄も、その著『藏書』巻十二大臣五 忠誠大臣に亮を記載し、清の康熙帝も遺詔において、亮の「鞠躬盡瘁死して後やむ」の語を引き、「人臣たる者ただ諸葛亮のみ能くかくのごとし」と嘆賞している(『清實錄』巻三百五 大清聖祖仁皇帝實錄)。

こうした中で雍正帝は、『清史稿』巻八十四 禮志に「(雍正)二年、視學・釋奠に、世宗以つて廟庭の諸賢を・饗せんとす。……是に於て復祀する者六人、……増祀する者二十人、……漢の諸葛亮……」とあるように、雍正二(一七

二四)年、釋奠を契機に亮を孔子廟の從祀に加え、孔子の侍神として祀ることを定めた。亮は、軍神であるとともに、儒者としても孔子廟で祭祀を受けることになったのである。こつして諸葛亮は、「忠義」ある武将であり、また政治的才能に秀でた儒者宰相として国家祭祀を受けることになり、ここに諸葛亮像は完成したのである。

おわりに

諸葛亮の同時代人は、亮の政治能力を讃美はしたが、その軍事能力には疑問を呈し、忠臣としての評価も未だ確立しなかつた。晉代には、陳壽の『三國志』の影響により、「忠」なる臣下としての諸葛亮像が形成され、南北朝時代には、亮の軍事能力に高い評価が集まった。隋唐時代になると、亮は文武兼才の理想の宰相と認識され、宋元時代には、軍事能力とともに宋学の影響により「忠義」の家臣としての諸葛亮像が尊重された。朱熹の亮像は、「官」製の亮像として一つの完成型を示し、朱子学の国教化とともに大きな影響を与えた。その結果、明清時代には儒者としての亮像も一般化し、「忠義」ある武将であり、政治能力に秀でた儒者宰相という「官」製の亮像が完成したのであった。

一方、「官」製の亮像に対して、民衆の亮像は、智謀に優れ必ず勝利を納める卓絶した軍師で、天候を操り奇術を使いどんな病氣も治す農民出身の神仙であった。こつした民衆の亮像を基底としながら、『三國志演義』は、民衆の亮像の荒唐無稽な部分を抑えつつ史実化に努めながらも、『三國志』の記述そのものではなく、「官」製の亮像である「忠義」の家臣としての諸葛亮を描こつとしたものであった。こつして諸葛亮は、『三國志演義』により「官」製の亮像と民衆の亮像とが融合された姿となり、軍神としてだけでなく、儒者宰相として孔子廟に配享されるに至つたのである。

- (一) 三国時代における歴史的存在としての諸葛亮が、劉備との如何なる関わりの中で、蜀漢政権を樹立したかについては、渡邊義浩「蜀漢政権の成立と荊州人士」(『東洋史論』六一九八八年)を参照。また、諸葛亮が益州においてどのような支配を展開したかに関しては、渡邊義浩「蜀漢政権の支配と益州人士」(『史境』一八一九八九年)を参照。さらに、諸葛亮が生きた三国時代における知識人層の存在形態については、渡邊義浩「漢魏交替期の社会」(『歴史学研究』六二六 一九九一年)を参照。
- (二) 中華民国の国立中央研究院では、「古籍全文資料庫」として、二十五史や十三經注疏が含まれる「漢籍全文資料庫」や「古漢語文獻資料庫」など漢字文化圏最大のデータベースを構築している。その一部は、インターネットを通じて世界に公開されており、日本からもアクセスできる(<http://www.sinica.edu.tw/fms-bin/fmsw3>)。本稿の正史の統計は、『三国志』以外はこのデータベースに依拠している。これの利用法などに関しては、私のウェブサイト・ページ(<http://www.daito.ac.jp/~ywata/>)を参照。
- (三) 陳壽の『三国志』をめぐる議論に関しては、雑喉潤「不遇の史書『三国志』のために」(『入江教授・小川教授退休記念 中国文学語学論集』一九七四年)を参照。また、陳壽に関しては、藤井重雄「陳壽傳について」(『新潟大学教育学部紀要(人文・社会科学)』一八一 一九七六年)を参照。
- (四) 張孟倫「評劉知幾対『三国志』的評論」(『中華文史論叢』一九八〇・三一 一九八〇年)も参照。
- (五) ここで言う名將とは、司馬懿を指している。『三国志』は、西晉を建国した司馬氏、および西晉が正統を継承する曹魏の建国者である曹操に関する記述に廻護する部分が多いと言われている(趙翼「廿二史劄記」卷六 三国志多廻護)。それは、旧蜀漢家臣として西晉に仕えるという陳壽の置かれていた政治的立場からは当然であろう。こ

うした曹魏・西晉政権への配慮が、魏書にのみ本紀を置くという『三国志』の構成となって現れているのである。

本田清「陳壽の三国志について」(『東方学』一三三 一九六二年)も参照。

- (六) 中林史朗「後漢末・晉初に於ける地方学者の動向・巴蜀地方に於ける无周グループを中心として」(『土浦短期大学紀要』九 一九八一年)

- (七) 宮川尚志「蜀姓考」(『六朝史研究 政治・社会篇』日本學術振興会 一九五六年)。

- (八) 中林史朗「西晉初期政治史の一断面」(『北京外国語学院・大東文化大学交流協定十周年記念論文集』一九九〇年)。

- (九) 土屋文子「『羽扇論巾』と諸葛亮」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要(文学・芸術)』別冊一八、一九九二年)、孫機「羽扇論巾」(『文物』一九八〇・三一 一九八〇年)を参照。

- (一〇) 後漢国家を「儒教国家」と規定し、中国国家の支配形態の原基と捉えることについては、渡邊義浩「後漢国家の支配と儒教」(雄山閣出版 一九九五年)を参照。

- (一一) 三国時代における文化的価値の多様性と貴族制に関しては、渡邊義浩「三国時代における『文学』の政治的宣揚・六朝貴族制形成史の視点から」(『東洋史研究』五四・三 一九九五年)を参照。

- (一二) 執筆順では、『三国志』の後は范曄の『後漢書』となるが、『後漢書』には七例の諸葛亮の記載があり、四例は後漢末の歴史事実、三例は地理的説明に亮の表などを利用したもので、諸葛亮への評価は記録されていない。

- (一三) 狩野直禎「西晉時代の諸葛孔明観」(『史林』五九・一 一九七六年)も参照。

- (一四) 『漢晉春秋』は、もと四十七巻(『隋書』卷二十三 經籍志)、あるいは五十四巻(『舊唐書』卷四十六 經籍志)であったが現在は散逸し、清の湯球の『漢晉春秋』輯本三巻が残存する。習鑿齒の属する襄陽郡の習氏は、

祖の習禎が亮とともに司馬徽に学び、蜀漢政権の建国に尽力して廣漢太守に至っている（『三國志』卷四十五 季漢輔臣贊）。「蜀姓」と呼ばれ差別を受けた旧蜀漢系の家柄である習鑿齒が、蜀漢の正統化とともに、祖先の顕彰を目指したことは十分に考えられる。『漢晉春秋』は、東晉の正統化の意識と祖先を顕彰したい習鑿齒の偏向が明確に現れている書物であると言えよう。

(一五) 袁宏の政治的立場と『後漢紀』の史料性格については、中林史朗「袁宏管見・政治的動静と『後漢紀』」、『大東文化大学漢学会誌』三二（一九九三年）を参照。

(一六) 西晋時代における諸葛亮の政治能力への高い評価の背景には、西晋の建国者武帝司馬炎が諸葛亮を尊重したところがある。陳壽に『諸葛氏集』を編纂させた司馬炎は、亮が施行した賞罰の信は、神明を感動させるに充分であったとの旧蜀漢の家臣樊建の意見に対し、「善いかな、我をしてこの人を得て以て自ら輔けしめば、豈に今日の勞あらんや」（『三國志』卷三十五 諸葛亮傳注引『漢晉春秋』）と述べている。この評価は、諸葛亮の公正な法の適用を典型とする政治能力の高さを讃えるもので、同時代人の諸葛亮評価を継承するものと言えよう。

(一七) このほか諸葛亮の文への評価として、梁の劉枋は、孔融の「褊衡を肅むる表」と対比して亮の「出師の表」を、孔融の作は「氣揚がり采飛ぶ」が、亮の「出師の表」は「志盡き文暢ぶ」とし、「華實旨を異にすと雖も、並に表の英なり」と論評している（『文心雕龍』卷五 章表篇）。

(一八) 郭漢林「雲南諸葛亮的伝説及其崇拜現象」（『雲南民族学院学报』一九九二・三一九九二年）を参照。なお、雲南省には、關羽の三男とされる伝説上の人物である關索に係わる伝説や遺跡も非常に多い。關索に関しては、井上泰山（他）『花関索伝の研究』（汲古書院 一九八九年）を参照。

(一九) 『三國志演義』第九十一回に、諸葛亮が瀘水を祀る時に麦粉をこねて人の頭をかたどり、牛・羊の肉をつめて

饅頭と名づけ、犠牲となるべき少数民族の命を救った話がある。この諸葛亮伝説は、宋の高承『事物紀原』、曾三異『因話錄』などに見え、少なくとも宋代には成立・普及していたと言われている。川上恭司「中国粉食文化考・諸葛孔明と饅頭」（『布目潮風博士古稀記念論集 東アジアの法と社会』一九九〇年）を参照。

(二〇) 陳翔華『諸葛亮形象史研究』（浙江古籍出版社 一九九〇年）を参照。また、諸葛亮に関する詩歌全般については、田旭中「歴代詩人筆下的諸葛亮」（『諸葛亮研究』巴蜀書社 一九八五年）を参照。

(二一) 南北朝時代に入ると、宋の劉敬叔が、四川地方に多かった天然ガスの井戸に係わる諸葛亮伝説を「蜀郡の臨暉縣に火井有り、漢室の隆なるには、則ち火赫彌々熾なり、桓・靈の際に暨び、火勢漸く微かなるも、諸葛亮一たび燬て更に盛なり。景耀元年に至りて、人燭を以て投ずるに即ち灰なり、其の年蜀魏に并さる」（『異苑』卷四 寫道）と伝えており、諸葛亮伝説の神秘化が一層進展していることを理解できる。

(二二) 唐代以降に本格的に形成される諸葛亮伝説については、金文京『三國志演義の世界』（東方書店 一九九三年）や注（二〇）所掲の陳翔華『諸葛亮形象史研究』を参照。

(二三) 『三國志平話』については、塩谷温「全相平話三國志に就て」（『狩野教授還暦記念 支那学論叢』一九二八年）を参照。また、語りもの文字としての『三國志』の一つである『三分事略』については、陳翔華「小説史上又一部講史平話へ三分事略」（『文献』一一一九八二年）を参照。

(二四) 小川環樹「三國志演義のもつた歴史書について」（『東洋の文化と社会』二一九五二年、『中国小説史の研究』岩波書店 一九六八年 所収）、井波律子『三國志演義』（岩波書店 一九九四年）などを参照。

(二五) 『三國志』卷三十二 先主傳注引『諸葛亮集』。ただし、魯王劉永のみが記載され、劉理は見えない。

(二六) 中華民国中央研究院の二十五史データベースに依拠して、『清史稿』を清代の正史と見なした数値である。

「正史における諸葛亮像の展開」

正史名	君臣関係	政治能力	軍事能力	その他	合計
『三國志』	一	三	〇	歴史事実一八	一一三
『後漢書』	〇	〇	〇	典拠三、歴史事実四	七
『晉書』	八	四	四	虚構一、その他の評価三、歴史事実一九	四〇
『宋書』・『北史』	九	五	一四	批判二、典拠三、その他四、歴史事実一六	五四
『隋書』・『新唐書』	一	三	五	文武兼才二、南中七、著録二二、その他四	三四
『新五代史』・『元史』	五	一〇	一三	祭祀六、道教四、その他七	四五
『明史』・『清史稿』	三	三	二	祭祀七、道教一、儒者二、南中四	二二

附記 本稿は、平成九年度大東文化大学漢学会大会（平成九年十月二十五日）で報告した「二十五史における諸葛亮像の変遷について」をまとめたものである。なお、本稿の作成には、日吉盛幸（文学部日本文学科）・渡邊義浩（文学部中国文学科）二名による平成九年度・平成十一年度大東文化大学特別研究（「アジア系文字処理の研究」）（費に係わる助成を受けていることを明記する）。